

10) 大腸・直腸癌の誤診検討と対策

原 敬治・佐藤 敏輝 (厚生連中央総合
病院放射線科)
湯川 貴男
石川 忍 (刈羽郡病院
放射線科)

1987.4~1991.6 までの当院における大腸・直腸癌 367 例を対象として誤診とその対策を検討した。誤診の定義として過去5年以内に注腸造影、大腸鏡、ロマンノスコーピー、直腸鏡、肛門鏡のいずれかを検査し、未発見のものとした。

対象期間内で当院誤診例は25例で、内訳は注腸13例、CF 4例、直腸～肛門鏡10例で、検査数を考えると注腸、CF 間には誤診率に有意差はない。2検査以上で誤診されているものが3例ある。他院誤診例は14例であった。

注腸誤診因は研修医の透視発見能力欠除が大半の理由である。注腸透視発見のカギは、① 二重造影だけに頼らず薄層法を重視する。② 空気量は出来るだけ少く。③ 直腸・S状結腸の8方向10枚撮影、④ 分割スポット撮影の重視、⑤ 盲腸部圧迫撮影、⑥ 立位撮影の廃止である。

11) 胆嚢の adenomyomatosis について

—US, 胆嚢造影, CT の比較検討

前田 春男・黒川 茂樹 (新潟市民病院
放射線科)
横山 道夫

昭和60年4月1日から平成3年4月30日の間に腹部US, 胆嚢造影(経口, 点滴静注)で、胆嚢の adenomyomatosis と診断された15例(男11例, 女4例, 31~67才)について、腹部US, 胆嚢造影およびCT所見を比較した。USでは、全例に胆嚢壁肥厚とコメット様エコーを認めたが、胆嚢造影で内腔の外側に小憩室様の造影剤の貯留像として描出された Rokitansky-Aschoff sinus の拡張像をUSでは、小嚢胞像として描出はできなかった。しかし、合併していたポリープや小結石の描出には有用だった。CTは、9例に施行され、7例に肥厚した胆嚢壁内に拡大した Rokitansky-Aschoff sinus に一致すると思われる小嚢胞や壁在の小結石を描出できた。

12) 非定型的な膵および膵近傍の腫瘍性病変の画像診断

湯川 貴男・佐藤 敏輝 (厚生連中央総合
病院放射線科)
原 敬治
石川 忍 (刈羽郡病院
放射線科)

膵および膵近傍の腫瘍性病変のうち、定型的な膵癌を除いた症例を集め、うち3例を呈示した。

1例目は74才女性。主訴は胸やけ。腹部エコーで膵尾部に径2cmの低エコー腫瘍、CTで均一に造影される腫瘍が発見され、切除の結果、膵島腫瘍と診断された。

2例目は41才男性。主訴は右季肋部痛。腹部エコー、CTで空気を含んだ膵近傍の腫瘍と2つの肝腫瘍が発見され、切除の結果十二指腸平滑筋肉腫とその肝転移と診断された。

3例目は60才女性。主訴は腹痛。膵頭部から鉤部にかけて著明な腫大を認め膵癌が疑われたが、1ヶ月後同部は縮小し膵炎と診断された。以上3例を呈示した。

13) 副腎骨髄脂肪腫と両側副腎石灰化を伴ったクッシング病の1例

関 裕史・塩谷 淳 (新潟県立中央病院
放射線科)
吉岡 光明 (同 内科)
山崎 信保 (同 外科)
関谷 政雄 (同 病理)

結節性副腎皮質過形成を示すクッシング病に副腎骨髄脂肪腫と副腎石灰化を伴った1例を報告した。

結節性過形成は、副腎に内在する結節性素因とACTHの長期にわたる副腎刺激により形成されるといわれている。また、副腎骨髄脂肪腫は副腎間質細胞に由来し、慢性のACTH刺激とステロイド過剰及び組織壊死が骨髄脂肪化の引き金となるといわれる。

本例は、ACTHの長期にわたる副腎刺激が、結節性副腎皮質過形成を形成するとともに副腎骨髄脂肪腫の誘因となる可能性を示唆するものと思われた。

14) 手術創に一致した広がりを示した後腹膜偽粘液腫の1例

三浦 恵子・秋田 真一
椎名 真・木村 元政
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

小児期に上行結腸と盲腸の手術歴のある50才男性において、組織学的には腹膜偽粘液腫と同一でありながら、その局在が後腹膜腔にあり、手術創にそって側腹部皮下